Action Nominal の特性について

A Note on English action Nominals.

津　田　早　苗

この小論文では，英語の action nominal の特性をいくつか観察する。

英語の生成変形文法の枠組を用いて名詞化の仕組みを最初に系統的に記述したのは，Lees[1] である。彼の指摘した数々の統語現象の一つに，action nominal と gerundive nominal の区別[2]があげられる。この二つの nominal のうち gerundive nominal は Rosenbaum[3], Kajita[4], Kiparsky[5] 等によって更に研究されその派生の仕方も変形によることは一致した見解とされている。

これに対し，action nominal には，二つの対立する見解が示されている。Fraser[6] は，action nominal も同様に変形によって導入されるとしているが，これに対し，Chomsky[7] は，action nominal は中間的性格を持つとしながらも基底部門において導入することを主張している。このような Chomsky の語い論的仮説に対し，変形論的立場をとる学者に，Newmeyer[8] も加えられる。

ここでは，一応 action nominal は変形によって導けるという前提に立ち，action nominal となり得る動詞の素性，主語との共起制限，修飾語と副詞との関係を考察してみたい。

---

1 Robert B. Lees, *The Grammar of English Nominalizations* (The Hague, 1963).
2 Lees (1963), pp. 59-73.
3 Peter S. Rosenbaum, *The Grammar of English Predicate Complement Constructions* (Cambridge, Mass., 1967).
4 Masaru Kajita, *A Generative Transforamational Study of Semi-Auxiliaries in Present-Day American English* (Tokyo, 1968).
5 Paul and Carol Kiparsky, "Fact", *Progress in Linguistics* eds. Bierwisch and Heidolph, (The Hague, 1970), pp. 143-73.
6 Bruce Frazer, "Some Remarks on the Action Nominalization in English", eds. Jacobs and Rosenbaum *Readings in English Transformational Grammar* (Waltham, Mass. 1970), pp. 83-98.
7 Noam Chomsky, "Remarks on Nominalization", eds. Jacobs and Rosenbaum (1970), pp. 184-221.
8 Fredrick J. Newmeyer, "The Derivation of the English Action Nominalization", *Papers from the Sixth Regional Meeting Chicago Linguistic Society* (Chicago, 1970), 408-424.

(1) 派生名詞と action nominal

Lees の言う action nominal と Fraser の言う action nominal は，形式化の点では，同じではないがここでは，Lees 及び Fraser の言う action nominal と派生名詞との差異を考える。先ず次の例文を考察する。

(1) The studies at the University of California's Lawlence Radiation Laboratory have furthur broadened *man's understanding of nuclear and particle physics.*[9]

(1)の例文において斜字体の部分の名詞句がどのように派生されるかをまず考える。一見するとこれは，$[[$man understand nuclear and particle physics$]_S]_{NP}$ という構造から派生すると考えられるかもしれないが，man's のかわりに定冠詞 the をとること，目的語 nuclear and particle physics の前に of のあることから (1) の nominal は gerundive nominal ではないことは明らかである。又，意味的には，man's understanding of... を man's knowledge of... としても意味が変わらないように直観的には感じられる。この観察を裏づける理由として考えられるのは，動詞 understand の持つ素性である。Lakoff の分類[10]にもあるように動詞 understand は，状態動詞であるから，Lees の指摘するように，action nominal にはなり得ない。よって例文 (1) の man's understanding は派生名詞であると考えられる。派生名詞であると規定すること自体はあまり意味はなく，派生名詞を Chomsky の主張するように基底部門で導入する規則を設けるか，変形論的立場で変形を導入するように規則を一般化するかが重要なのだが，ここでは，派生名詞と action nominal は区別されなければならないとするにとどめる。

(1) の例文においては，動詞の持つ素性によって action nominal と派生名詞を区別したが，次のような場合はどうであろうか。

(2) The regular Lebanese opposition was "*a stronger showing* than in any of our operations up until now."[11]

(2) の例文において，showing のもとの形と考えられる動詞 show は，動詞 understand とは異なり状態動詞ではない。しかし，斜字体の部分を action nominal と考えるのは意味上の show と showing の関係を考えると無理であるように思える。この文における showing は

9 *Chemical and Engineering News*, February 8, 1971.

10 George Lakoff, "Stative Adjectives and Verbs", NSF-17 (1966) 1-16.

11 *The Japan Times*, September 18, 1972.

「主張」という意味であって，動詞 show「見せる」との直接の結びつきは考えられない。よって， a stronger showing を命題から導くとすると抽象的な動詞を設定するか何らかの方法をとらねばならなくなる。何故なら show は showing とは，前述の通り結びつかず，形容詞 strong は，副詞 strong から由来したというより名詞 showing を修飾している形容詞であると考えた方が妥当である。

(2) の例から action nominal は動詞と意味的に深い関連のあるものに限り，名詞化されると固有の意味を持つに至るものは，たとえもとの動詞が動作動詞であろうと派生名詞とみなされなければならないように思われる。前に述べたように，派生名詞をいかに扱うかは，Chomsky の提案をとるか否かという問題と深く関係してくるがここでは(2)のような派生名詞を action nominal と同じ形の変形で導くことは無理ではないかということを示唆するに留め更に action nominal の性質について論をすすめる。

以上，派生名詞と action nominal を区別する際の動詞の性質について述べたが，次に action nominal の主語について考察してみたい。動作動詞の性格上，その主語は，一般に生物であることが多いが，文法記述の上で生物と限定することには問題があるように思われる。

(3) Opposition parties, however, feared that such *a broadening of the scope of conduct of the U.S. Forces* would certainly lead to an expanded interpretation of treaty.[12]

上の文において，broadening は，表層構造を見る限りは，派生名詞，action nominal のどちらとも考えられるが，意味上は， broaden という動作動詞と深く結びついていることから action nominal とみなした方が妥当であるように思える。しかし，これを action nominal と考えると名詞化される前の命題の中の動詞 broaden の主語が何であるかが問題となる。(3)の名詞化された形を見ると二つの可能性が考えられる。一つは the U.S. Forces が agent-post-posing[13] で by the U.S. Forces となってうしろにおかれ，その後 by が of でおきかえられたと考える考え方であり，もう一つは，主語が名詞化の過程で消去されたと考える見方である。どちらの場合を考えてみても，主語は，必ずしも生物ではなくても良いことは明らかである。例えば，後者の考えにとって省略された主語が次のようなものだと考えることもできる。

(3′) $[$the Japanese Government broaden the scope of conduct of the U.S. Forces$]_s$

12 *The Japan Times*, September 18, 1972.
13 agent-post-posing は Chomsky (1970) に提案された規則である。cf. p. 203.

もし (3′) のような深層構造が正しいとすると action nominal となり得る動詞と主語との共起制限に関して，主語は，何か働きかけをする意志[14]はあるが，必ずしも生物でなくても良いと考えられる。格文法における Agent となりうるものが主語であると規定しても，やはり Agent は，Fillmore[15] によると生物でなければならないとされているので解決にはならない。

(3)′においては，主語は生物ではないが，意志を持つものだと規定したが，action nominal となり得う動詞がすべて意志動詞であり，その主語は意志を持つということはないということは次の例からもわかる。

(4) Even *a bottoming out* in employment is obviously far better than a continued decline.[16]

上の例において bottom out するものは何も意志を持っていない。しかし，bottoming out を shortage あるいは scarcity のような語でおきかえることが可能だとみなせば (4) の例は派生名詞とみなされ得るかもしれない。しかし bottom out の持つ動作をあらわすという性質が a bottoming out という表現にもあると考えればこれは action nominal である。[17]

更に主語が意志を持たず無生物のものの例をあげる。

(5) the rolling of the stone[18]
(6) the roaring of thunder

(5) の例では，the stone は意志も持たないし，生物でもないが，地球の重力によってころがるので action nominal として可能だと考えられる。又，(6) の例でも，thunder は無生物で，意志も持たないが，自然現象としてあたかも雷がゴロゴロと空をかけめぐるようなので action nominal として可能である。

以上，派生名詞と action nominal とを比較し，action nominal の主語の性質を考察したが，次節ではこの action nominal の特性をまとめ問題点を指摘したい。

---

14 Lakoff の〔+stative〕〔−statiwe〕の区別の他に〔+volitive〕〔−volitive〕の区別が必要なことは命令文の構造に関して，阿部桂子氏が指摘している。（未公刊国際基督教大学修士論文）

15 Charles J. Fillmore, "The Case for Case", eds. Back and Harms, *Universals in Linguistic Theory* (New Yok, 1968), pp. 1-88.

16 *Chemical and Engineering News*, October 2, 1972, p. 10.

17 action nominal の中間的性格は，(4) のような例にもうかがわれるが，このような性質を持つので英米人にはぎこちない表現としてうけとられ，文学作品などにはあまり用いられず，科学的論文により多く用いられるのかもしれない。

18 この例は国際基督教大学の井上和子教授の御指摘による。

2 action nominal の特性と問題点

まず，action nominal となりうる動詞の素性を検討する。Lees の指摘したように，action nominal となり得る動詞は進行形となり得る動詞でなければならない。 又，前節で観察したように action nominal となる動詞は次のような意味特徴を持っている。

(a) 動作をあらわす。

(b) 意志をあらわす。

(c) 自然の力，現象をあらわす。

更に (a), (b), (c) の意味特徴を持つためにその主語に対する選択制限もあわせてもつ。主語としては，次のようなものが可能である。

(a′) 動作を行うことのできるもの。一般的には生物。

(b′) 意志決定を行うことの出来る動物，又は団体等。

(c′) 自然の力によって動作を行うもの。

動詞の素性の常として (a), (b), (c) は別々に存在せずどちらか区別がつかないことが多いことは次の例からもわかる。

(7) From his cell, Tankerley talked to Time's Chris Anderson *about the making and unmaking of a violent revolution.*[19]

(7)において，主語は，生物又は団体であり，make 及び unmake は動作とも意志とも解釈される。同様なことは次の例にもいえる。

(8) *The levelling off of reserch support*, and now *the tightening up of the employment situation for chemists* has produced widespread concern...[20]

主語が無生物で意志を持ちえないものの例は前節 (5), (6) にあげた。

変形によって action nominal となるための，動詞の素性及び選択制限について以上のような観察がなされたが，より広範囲のデーターを扱うことがなされれば，素性が細分化される可能性も考えられるし，より一般的な記述がなされるかもしれない。

次に action nominal の前につく修飾語について考える。Lees, Katz と Postal[21] 等は，

---

19 *Time*, February, 22, 1971.

20 *Chemical and Engineering News*, February 15, 1971.

21 Jerrold J Katz and Paul M. Postal, *An Integrated Theory of Linguistic Description*. (Cambridge, Mass, 1964).

それらは，様態をあらわす副詞から由来すると主張しているが，action nominal は，gerundive nominal より，より名詞的になっているので，名詞化された後に，定冠詞，不定冠詞等がつくことからみて，より自由な prenominl modifier の選択が可能であるようである。例えば次のような例があげられる。

(10) Howard Morgan states that *more testing of NTA* has done...

勿論(10)のような形をとるものは派生名詞とみなせば問題はなくなるが，前に述べたとおり基準にあわないものはすべて派生名詞と考えることはあまり益がないように思われるので，(10)のようなものも action nominal に含めれば当然名詞化の後に様態の副詞から由来した形容詞以外のものも修飾語としてとることを記述しなければならないように思われる。

また，action nominal をどういう形式のものに限定するかも大きな問題である。前節でもとりあげた agent-post-posing の行われたもの，又，次の例のように目的語が前に来たものもどうように派生するかを検討しなければならない。

(11) Mr. Nader's *whistle blowing* seems to fit nicely into our traditional system of checks and balances.[23]

(11)の whistle blowing を成句と考え深層構造 $[[\text{Mr. Nader blow whistle}]_S]_{NP}$ のようなものとこの場合は関係づけずに派生名詞とみなすことも可能かもしれないが，もとになる命題と名詞化された表層の形の関連を考えた方が説明しやすいものがあるのも事実である。例えば，次のような例があげられる。

(12) Another of Mr. Nixon's six great goals —*revenue sharing*— faces a long uphill battle in Congress.[24]

(13) In remarks prepared for ACS Northeastern Section Meeting at MIT, she faults the lack of *federal manpower planning*.[25]

action nominal の構造，派成の仕方を記述する際に (11), (12), (13) のような構造も含むかは今後の検討を要する課題である。

action nominal の深層の動詞の素性，選択制限，様態をあらわす副詞と prenominal

22 *Tim*, February 22, 1971.
23 *Chemical and Engineering News*, February 8, 1971.
24 *Chemical and Engineering News*, February 1, 1971, p.6.
25 *Chemical and Engineering News*, February 15, 1971, p.12.

modifier との関係は，action nominal の構造の記述には必要だが，よりすすんで派生名詞との関連においてより一般的に記述しない限り，action nominal の構造にあわないものは，派生名詞としてしまうだけで文法全体として正しい記述がなされたとは言えない。action nominal は，その中間的性質上，派生名詞とあわせて考察することが今後の課題であるように思われる。

参考文献

Bresnan, Joan W. "On Complmentizers: Toward a Syntactic Theory of Complement Types," *Foundations of Language* 6 (1970) 297-321.

Chomsky, Noam. "Remarks on Nominalization," eds. Jacobs and Rosenbaum *Readings in English Transformational Grammar*. Waltham, Mass, 1970.

Fillmore, Charles J. "The Case for Case," eds. Bach and Harms *Universals in Linguistic Theory*. New York, 1968.

Fraser, Bruce. "Some Remarks on the Action Nominalization in English," *Readings in English Transformational Grammar*.

Kajita, Masaru. *A Generative Transformational Study of Semi-Auxiliaries in Present-Day American English*. Tokyo, 1968.

Katz, Jerrold J. and Paul M. Postal. *An Integrated Theory of Linguistic Description*, Cambridge, Mass., 1964.

Kiparsky, Paul and Carol Kiparsky. "Fact," eds. Bierwisch and Heidolph *Progress in Linguistics*. The Hague, 1970.

Lakoff, George. "Stative Adjectives and Verbs," NSF-17 (1966) 1-16.

Lees, Robert B. *The Grammar of English Nominalization*. The Hague, 1963.

Newmeyer, Frederick J. "The Derivation of the English Action Nominalization," *Papers from Sixth Regional Meeting Chicago Linguistic Society*. (1970) 408-424.

Rosenbaum, Peter S. *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*. Cambridge, Mass., 1967.

Wilkinson, Robert. "Factive Complements and Active Complements," *Paspers from Sixth Regional Meeting Chicago Linguistic Society*. (1970) 425-444.